

《調査》

生活満足感と中流意識〔Ⅱ〕

藤 森 俊 輔

〔前回までの要約と本稿の課題〕

我々はこちらまで次のような記述をしてきた。我々は人々の生活を三つの生活の場——家族、職場、地域——における多様なニーズの充足のための生活活動のシステムにとらえ、そのニーズ充足による満足の何らかの総合として生活全体の満足が成りたっていると仮定した。そして、これら諸満足感の実態と構造を分析した。その結果、23項目の満足感を7つの因子にまとめることができ、更に、生活全体の満足が労働生活の満足と家族消費生活の満足感によって、基軸的に規定されているという因果的関係を明らかにした。我々はこれを、生活体系の基軸としての労働—生活過程の満足感が、生活全体の満足感を規定していると要約した。

こうして、我々は次にとりわけ労働生活のあり方に焦点を移して、それぞれがその職業生活をどう評価しているかの意識構造を問題としてみた。すなわち、労働生活において、生活主体が追求する要求を10項目にわけ、それらについて、自分の職業がどの程度達成されていると評価できるかの観点から自己評価を行なってもらい、そうした自己評価の構造を明らかにしてみようと試みた。その結果我々は、それが4因子からなるものと分析的にまとめる事ができた。

本稿では、こうした記述につづけて、まず、生活全体の中心的価値、すなわち、中心的生活目標となり、生きがいとなるものが何であるかを明らかにする。また、ついで労働生活がどのような労働生活価値を追求する営みとなっているかを分析する。すなわち、労働において充足をめざされる要求にいわゆるマズローなどのいう意味での階層性がある事は指摘されていることであるが、人々によって今日、もっとも重視される生活の要求は何か、労働生活において追求される中心的価値は何かを明らかにする。労働生活の豊かさ、それ

と関連する生活の豊かさは、物質的生活のミニマムな保障、オプティマムな水準の確保を欠くことができないとしても、それをもつばら賃金の大きさの要求などを重視する形で意識しているのかどうか。こうした労働生活の要求の一定のあり方をクライテリアとして、人々はそれぞれの職業をどんな達成度をもつものと自己評価しているのか。生活満足の構造とこの自己評価の構造については前稿（一）で明らかにしたのであるが、この構造と価値観の関係をここではまず明らかにしておく。このような検討の中で生活の満足と生きがいがどのように労働生活と相関するのかを明らかにして行こう。こうした問題はいわゆる“生活の質”の問題の重要な次元をなしている。（註1）分析を続けて行く過程で、本稿は表題の範囲をこえて意識次元での“生活の質”を大きく問題とすることになり、表題は「生活の質からみた階層分化」とするのがむしろ妥当なものとなった。

以上のように、我々は生活満足の構造と量、および労働生活の質の構造および充足量という点に焦点をあてて、サンプル全体の特性をとらえると同時に、ついで収入、職業などの階層的地位の異なるに応じて、これらの満足水準や質的充足がどのように異なるかを明らかにし、こうした観点から、生活の質をめぐる階層分化がどのようなものとして成立しているのかを解明して行こう。更に、最後に、中流（階層帰属）意識が、こうした階層分化とどのような関連にあるかを明らかにする事によって、中流意識の特性の一端を明らかにしよう。

#### 〔中心的生活価値＝生きがい感〕

我々のサンプルにみる生きがいのあり方は、表1にみるように75%の人が生きがいを感じ、表2にみるように44.8%が仕事中心型 Work Centrality である。昭和40年代から50年代にかけて、全世代を対象にした調査の示すところによると、仕事中心型が減少しつつあり、53年には37%となっている（註2）のに対して大きな比率をしめているが、最近のMOW 国際比較調査のデータ（註3）とほぼ照応しているものである。我々のサンプルの年代層が高いということにも理由があるのかもしれないが、いずれにしても、国際的比較では日本がもっとも高いといわれることからして、我々日本人の生活の質を示す一特色といえるかもしれない。Work Centrality 型についで多くみられるのは、家族（子供、配偶者）中心型であって21%をしめている。このような Work Centrality 型が多数をしめているということは、やはり我々のサンプルの年代においては、仕事中心の生き方が規範化しているだろうことを推定せしめるものがあろう。

表 1

あなたは現在生きがいを感じていますか。

	実数	%
5. 非常に感じている。	63	22.0
4. まあ感じている。	152	53.1
3. どちらともいえない。	51	17.8
2. どちらかというと感じない。	9	3.1
1. 空虚である。	4	1.4
無 回 答	7	2.4
計	286	100.0

表 2

あなたは次のうちのそれぞれの時に一番生きがいを感じますか。該当する箇所に○をつけて下さい。

	実数	%
1. 仕事をしているとき。	128	44.8
2. 子供といるとき。	40	14.0
3. 配偶者といるとき。	21	7.3
4. 友人などつき合っているとき。	23	8.0
5. レジャーをしているとき。	28	9.8
6. 社会的活動をしているとき。	10	3.5
7. 信仰などをしているとき。	12	4.2
8. 何もしていないとき。	8	2.8
9. その他	9	3.1
無 回 答	7	2.4
計	286	100.0

この生きがい感と自己の職業生活の関係はどのようなものになっているだろうか。前稿(一)の表17にみられるように、職業にとって重視されるべき点は、24%の人が「自分の能力の発揮」をあげており、また16%がそれを2番目にあげていた。また、労働生活の達成度の第1因子にあたる労働の主体的要因とでもいうことのできる「能力発揮」「労働の内容の面白さ」「自己の裁量でやる余地の大きい仕事」などの諸項目を一番目に重視する人を合計すると43.6%に達している。(註4) これに対して第2因子+第4因子にあたる「収入」「雇用安定」「健康を損わぬ職場」などの直接的に物質的生活条件にかかわる要素を第一番に重視する人はおよそ50%をしめていた。したがって、人々の職業ないし労働の価値づけは、第1因子、第2因子に対応するこの二つのタイプに二分されているといつてよいだろう。

生きがい観とこうした労働の評価のあり方との関連をみると、次のようになっている。

表3によると、Work Centrality型の生活価値をもつ人は、職業評価のクライテリアをまず、「能力発揮」「仕事の社会的意味」などの労働の主体的要因におく人が53%であり、「収入」「雇用安定」「健康」におく42.4%より多数をしめている。

これに対して、家族中心型の場合、むしろ職業評価基準は正反対の項目を重視している。すなわち、その60.8%が「収入」「雇用安定」「健康」を重視し、労働の主体的要因を重視する人は30%弱であるにすぎない。

表3 生活全体の生きがいと労働で重視すべき点

(行%)

仕事の良し悪し 生きがいを感ずる活動	自分の能力が 思いきり発揮 できる仕事	世の中のため になる仕事	内容が興味 もてて面白い 仕事	自分の裁量で やる余地の大 きい仕事	よい仕事仲間 のいる仕事	高い収入が得 られる仕事	失業のおそれ のない仕事	健康をそこな わない快適な 労働条件のあ る仕事	昇進や成功の チャンスの多 い仕事	働く時間が短 く、暇な時間 の多い仕事
仕事をしている とき	28.2	13.6	8.0	4.0	3.2	8.8	18.4	15.2	0	0
子供といるとき	15.4	5.1	5.1	2.6	10.3	20.5	17.9	20.5	2.6	0
配偶者といるとき	20.2	10.1	0	0	10.0	25.0	15.0	15.1	5.0	0
友人などつき 合っているとき	31.8	9.1	9.1	4.5	0	13.6	22.7	4.5	4.5	0
レジャーをして いるとき	14.8	3.7	11.1	0	3.7	18.5	25.9	18.5	0	3.7
社会的活動をして いるとき	66.7	11.1	11.1	0	0	0	11.1	0	0	0
信仰などをして いるとき	16.7	25.0	0	0	16.7	16.7	8.3	8.3	0	8.3
何もしていない とき	28.6	0	0	0	0	28.6	42.9	0	0	0
そ の 他	22.2	11.1	0	0	0	11.1	33.3	0	0	22.2

同様に「社会活動」に生きがいを感じる人は88%が労働の主体的要因を重視し、レジャーに生きがいを見出す人の63%が後者の物質的条件を重視して自己の職業を評価している。

以上により、中心的生活価値＝生きがいと職業評価に基本的な二つのパターンを区別できよう。一方は Work Centrality 型で労働の主体的要因をクライテリアとして自己の労働生活を評価するタイプと、他方は、家族中心型で収入・雇用安定などをクライテリアとするタイプである。そして両者の合計は我々のサンプルの年代層のうち、過半をしめる事になっている。

#### 〔生活満足の大きさと生活価値意識〕

生活満足全体の大きさは、労働—生活過程の基軸に関する満足意識によって大部分説明される事がすでに明らかにされた。労働生活満足因子と家族消費生活満足の二因子にまとめられるこの基軸的満足は、生活の質とかわる中心的生活価値＝生きがい観や、自己の職業生活における大事な条件と考えるもの、すなわち、職業の評価基準とどのような関係をもつものだろうか？

表4にみるように、Work Centrality 型の生きがい観をもつ人は、労働生活の満足因子と家族消費生活満足因子の基軸的満足度でもっとも高い。これに対して家族中心型の生きがい観の人は、対照的にこれら2因子でもっとも満足度の低い人たちであるといっておく。同様にレジャー中心型は負の値、すなわち全体の平均的満足度を下まわっている。こうして、Work Centrality 型は、生活体系の基軸において、生活満足度を高くしている人たちであるといえよう。

同様に、生きがいを感じる大きさと生活満足量の相関をみると、生きがいを感じる人が労働生活満足因子において生活満足を平均的な水準をこえて感じているということになっている。これに対して生きがいを感じない人は労働生活の満足が低く、消費生活の満足が高いということも注目してよい事であろう。

同じ表から「職業の評価基準(1)」として第一番目に「能力発揮」「仕事内容の面白さ」「世の中のためになる仕事」など労働の主体的要因をあげている人の労働生活満足はその他の労働諸条件を重視する人と比較して、きわだって高い満足をえている人たちである事がわかって来る。それに対して、「収入」「労働時間の短さ」「昇進」「職場の仕事仲間」を第一に重視する人の労働生活満足量は低くなっている。これに対して第二番目に「昇進」を重視する人もきわだって労働生活満足量が高いことがわかって来る。

表 4  
職業評価基準別（1 番目、2 番目に重視）、生きがい観別生活満足因子スコアの平均値

		労働の私的動機充足	家族消費生活
職業 の評 価 基 準 1	高い収入が得られる仕事	-0.4982	-0.2269
	失業のおそれのない仕事	0.0092	-0.1045
	働く時間が短い仕事	-1.0767	0.3179
	昇進や成功のチャンスの多い仕事	-0.3847	-1.6821
	自分の能力が発揮できる仕事	0.1684	0.1314
	内容が興味ももてて面白い仕事	0.4358	0.1687
	よい仕事仲間のいる仕事	-0.0258	-0.0215
	自分の裁量でやる余地の大きい仕事	0.1606	-0.0772
	健康をそこなわない労働条件のある仕事 世の中のためになる仕事	0.0021 0.6156	0.0481 0.0951
職業 の評 価 基 準 2	高い収入が得られる仕事	0.0368	-0.0008
	失業のおそれのない仕事	-0.0208	-0.0425
	働く時間が短い仕事	-0.1180	-2.0708
	昇進や成功のチャンスの多い仕事	0.4461	0.7594
	自分の能力が発揮できる仕事	0.2495	0.1650
	内容が興味ももてて面白い仕事	0.3261	0.0606
	よい仕事仲間のいる仕事	-0.1539	-0.2735
	自分の裁量でやる余地の大きい仕事	0.2510	0.1681
	健康をそこなわない労働条件のある仕事 世の中のためになる仕事	-0.0241 -0.1249	-0.1315 0.2803
生き が い 水 準	空虚である	-0.3543	0.3228
	どちらかというと感じない	-0.8525	0.0660
	どちらともいえない	-0.2622	-0.2051
	まあ感じる 非常に感じる	0.0872 0.2522	-0.0684 0.3479
生き が い を 感 じ る 活 動	仕事をしているとき	0.2948	0.1742
	子供といるとき	0.0697	-0.3290
	配偶者といるとき	-0.5442	-0.1327
	友人などどつき合っているとき	-0.1238	-0.0291
	レジャーをしているとき	-0.0463	-0.0704
	社会的活動をしているとき	0.1849	-0.0041
	信仰などをしているとき	-0.5495	-0.1134
	何もしていないとき	-1.3235	0.0735
	そ の 他	-0.1774	-0.1989

このように労働生活満足因子に関していえば、生きがい観や生きがいの大きさ、職業評価のクライテリアとして何を重視するかという事が明白に関連しており、Work Centrality型の生きがいをもち、職業生活については、労働の主体的要因の充足を重視する人と、家族中心型、レジャー中心型の生きがい観、労働の客体的要因を重視する人という二つの価値意識の所有者の間で、労働生活満足量に大きな差がある事を確認できたといえよう。しかし、生活満足のその他の副次的因子については、このような明白な関連は明らかではない。

#### 〔生活価値・職業の評価基準別にみた職業における価値充足度〕

では、仕事中心型の生きがいをもつ人、家族関係やその他の生きがい観をもつ人の労働生活において重視する条件の充足度はどのようにになっているだろうか。表5は、それぞれの職業を上記10項目の点でどれだけ良い職業とみなされうるかを5段階で回答してもらったものの因子分析により得た4因子のうちの「労働の主体的要因」と「収入—地位」の2因子のスコアの価値態度別、満足の大きさ別平均値を求め、これを、これら2因子を二軸とする空間に位置づけて整理したものである。

同じく表6は「失業のおそれがない」こと、「労働時間が短い」、「健康を損わない労働条件」などについての評価からなる「労働条件の因子」と、「よい仕事仲間」に関する因子を二軸として同様な平均点を位置づけ整理したものである。

これらの表によって、まず生きがい観と労働生活における価値充足度の関連をみてみよう。

第一にもっとも多い Work Centrality 型の生きがい観をもつ人は、労働の主体的要因の点で達成度が高いと自己評価しており、また収入—地位の点でも高くなっている。しかし、労働条件と仕事仲間の因子では自己評価が低い。

これに対して、次に多い家族中心型生きがい観の人は、労働の主体的要因の点で、仕事中心型ときわめて対照的である。しかし、収入—地位については、平均的にはむしろ低いといってよいが、高いと評価する人もかなりみられる。労働条件についても同様であるが、仕事仲間については高い達成度と評価している。これからして、二つのタイプは概して対照的な二つのタイプとみてよいように思われる。

次に、職業について何を最も重視すべきかの価値標準とその達成度の自己評価の関連をみてみよう。第一に、まず労働の主体的要因とみられる項目を重視する人たちは、その職業における労働の主体的要因の達成度の評価は高い。また、収入—地位の因子につい

表5  
生きがい、職業評価の基準として重視する項目と、自己の職業の達成度の評価（因子スコア）

		収入—地位の因子	
		高い	低い
労働の主体的要因の因子	高	仕事に生きがいを感じる  能力発揮できる仕事を重視 興味ももてて面白い仕事を重視  労働生活に非常に満足 労働生活にまあ満足  生活全体に非常に満足 生活全体にまあ満足	社会的活動、信仰に生きがいを感じる  世の中のためになる仕事を重視
	低	子供、友人、レジャーに生きがいを感じる  働く時間が短い仕事を重視 健康を損わない労働条件のある仕事を重視  労働生活に不満 労働生活にどちらともいえない 生活全体にどちらともいえない	配偶者といるとき、何もしていないときに、生きがいを感じる  高い収入が得られる仕事を重視 失業のおそれのない仕事を重視 昇進や成功のチャンスの多い仕事を重視 よい仕事仲間のいる仕事を重視 自分の裁量でやる余地の大きい仕事を重視  労働生活にやや不満  生活全体にやや不満 生活全体に不満

でも、概して高いといってよい。これに対して、労働条件や、仕事仲間の点での達成度の評価は、全体として高いとは必ずしもいえない。

これに対して、「収入」「地位」や「雇用安定」「健康を損わない労働条件」などをもっとも重視する人たちは、労働の主体的要因で達成度の評価は低く、また、「収入—地位」についても、それを重視するにもかかわらず、低い評価をすることになっている。「労働条件」の因子や仕事仲間については低いと概括するのは必ずしもできないが、概して高いという



表 6

		仕事仲間の因子	
		高い	低い
労働条件の因子	高い	子供といるときに生きがいを感じる  健康を損わない労働条件のある仕事を重視 世の中のためになる仕事を重視  労働生活に非常に満足 労働生活にまあ満足  生活全体に非常に満足 生活全体にまあ満足 生活全体にどちらともいえない	レジャー、社会的活動、何もしていないときに生きがいを感じる  高い収入が得られる仕事を重視 失業のおそれのない仕事を重視 能力発揮できる仕事を重視  労働生活に不満 労働生活にやや不満
	低い	仕事、友人、配偶者に生きがいを感じる  働く時間が短い仕事を重視 昇進や成功のチャンスの多い仕事を重視 興味をもてて面白い仕事を重視 よい仕事仲間のいる仕事を重視 自分の裁量でやる余地の大きい仕事を重視  労働生活にやや不満	信仰などをしているときに生きがいを感じる        生活全体に不満 生活全体にやや不満

こともできない事は明白であろう。

こうして、この点については、労働の主體的要因を重視する価値標準の所有者と、より物質的な労働条件や収入—地位、および職場の人間関係を重視する労働生活価値の持主との間に、その達成度のあり方の水準の分化が存在すると概括することができるであろう。

こうして、自己の労働生活の価値達成度に関して、いわば労働生活の質に二つのタイプが分化している事がほぼ明らかになった。

次に、労働生活に満足している人は、どのように自己の労働生活を評価しているのだら

うか？労働生活に満足している人は、相対的に労働の主体的要因にも、収入—地位にも高い達成度にあるとしており、労働条件、仕事仲間にも高い評価を与えている。これに対して、労働生活に何らかの不満を感じる人は、全体としてこれら4つの因子のすべてに高い評価を与える事ができない人たちである。労働生活における価値の達成度は明らかに強く相関しており、労働生活の質と満足量はきわめてよく対応した関係にあるとみてよい。と同時に前記の二つのタイプの分化は労働生活満足の上でも対応しているといつてよいだろう。

生活全体の満足は労働生活のニーズ充足によって因果的に規定されていたが、生活全体に満足している人は、やはり労働の主体的要因や収入—地位の点での自己評価が相対的に高く、労働条件、仕事仲間についても高い。

以上によって、労働生活を労働生活意識面でみるかぎり、二つの量、質ともにきわめて対照的な二つのタイプが分化していると結論できよう。

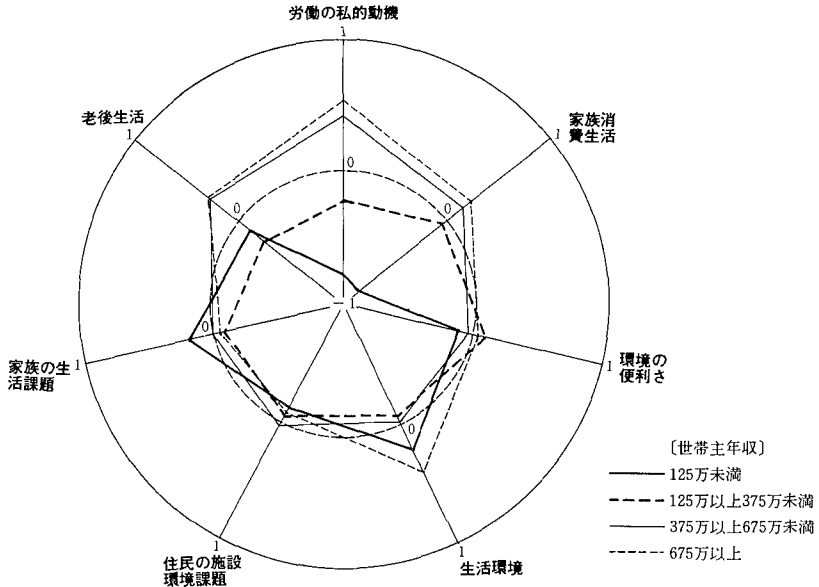
一つは、仕事中心型の生きがい観をもち、労働の主体的要因を重視する労働生活を送り、労働生活全体や生活全体満足の高い人たちであり、他は、家族中心型・レジャー型で、労働の客体的条件や生計にかかわる要因を重視する人であり、労働生活全体や生活全体の満足の低い人たちであって、両者は自己の職業について、労働の主体的要因、および、収入—地位因子について対照的な達成度をもつものと自己評価している。

#### 〔収入階層地位別にみた生活の質〕

さて、以上のサンプル全体について識別しえたタイプが、各階層上の地位とどう相関するか、いいかえれば、各階層上の地位の相異は生活満足のあり方および労働生活の質からみたタイプ分化とどう関連しているのかを明らかにしてみよう。

我々は回答者本人（世帯主）の年収を収入満足の分散を基盤に4階層に区分したものを収入階層上の地位として設定してみた。図1はこの地位を階層指標にして、生活満足の7因子の因子スコアの地位別平均値を求めて描いたものである。内心円は因子スコア0を示し、当該因子の平均点を示す。したがって、負の値は平均以下であり、正の値は平均をこえている。図によると、収入階層上の地位の序列と明確に対応するものは労働の私的動機満足の因子と家族消費生活満足の因子である。この労働—生活過程の基軸にかかわる満足の点で収入階層の地位に応じた満足レベルの差異が看取できよう。375万以上層と以下層のあいだに、特に労働生活上の要求満足感の差が大きい。

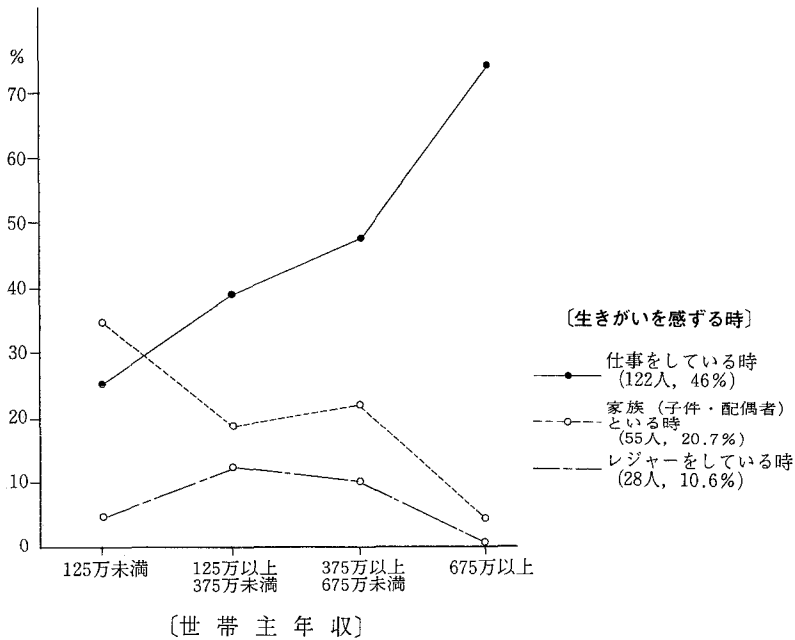
図1 収入階層別生活満足の特徴



中心的な生活価値＝生きがい観と収入階層はどのような関係にあるだろうか。図2は、各収入階層上にしめる異なった生きがい観の比率を表したものである。これによると、収入階層上の地位が上昇するにしたがって、Work Centrality 型のしめる比率が上昇し、675万以上層では大部分が仕事中心型になっている。これに対して、家族関係型+レジャー型は収入の低い階層ほど多くなっているというパターンをほぼ示している。

ついで、生きがい感の大きさについてみるとどうなるであろうか。生きがい感の大きさには、生きがい観のタイプの分散にみるような顕著な差異は見出せない。この点は、サンプル全体についてもいえることであって、生きがい観の差異によって生活満足のあり方と大きさは変るが、生きがいの大きさが大きく変化するということはいえなかった。すなわち、中心的生活価値が相異し、生き方が異なろうとも、それぞれが生きがいを感じているのであって、階層差は生きがいの大きさにあるのではなく、生き方の相異に現れていると

図2 収入階層別にみた生きがい観



いってよいようだ。

では、収入階層によって、労働生活はどのような質的な差異を示すだろうか。(図3)ここでは10項目のうち主要なものをあげてあるが、労働の主体的要因を重視して労働生活を評価する人(「能力発揮」,「ためになる仕事」)は明らかに収入階層上の地位が高くなるほど多くなっており、両者の合計が675万以上層では大多数をしめる事になっている。これに対して、労働の客体的条件(「収入」,「健康を損わない快適な労働条件」)を重視する人は収入が低い層ほど高くなっている。これらから、やはり、二つの価値タイプの相異と収入階層の対応関係を看取できるであろう。

その労働生活の価値達成の自己評価についてもまったく同様な結果をみてとれよう。表7によると、自己評価の4因子のうち、「労働の主体的要因」「収入—地位」の2因子につ

図3 収入階層別労働生活の評価基準

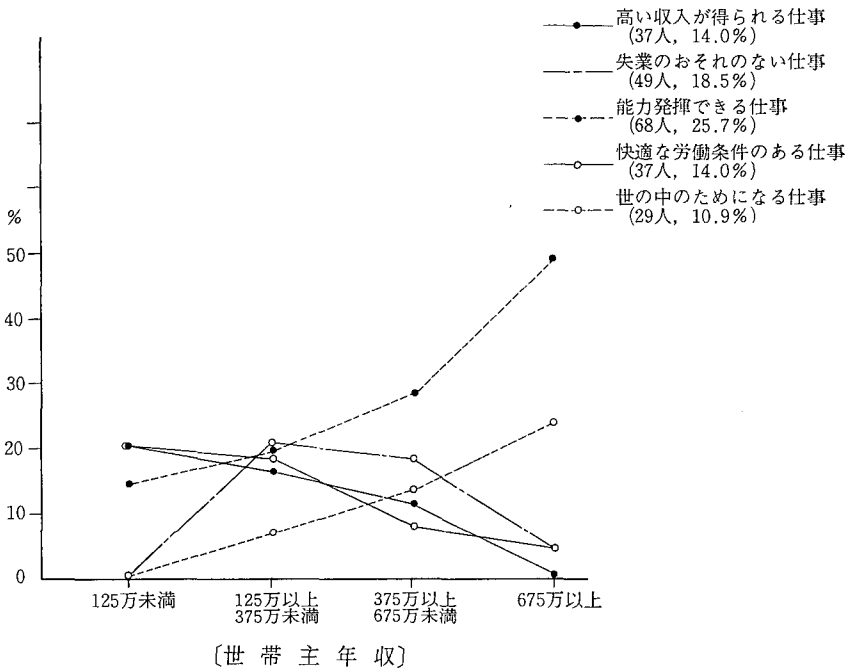


表7 収入階層別にみた自己の職業の労働生活の良さの自己評価

世帯主年収	職業の自己評価	労働の主体的要因	労働条件	仕事仲間	収入一地位
125万円未満		-0.8638	-0.5540	-0.1161	-0.3996
125万円以上 375万円未満		-0.0041	-0.0908	-0.0532	0.0018
375万円以上 675万円未満		0.1545	0.2388	0.1241	0.0463
675万円以上		0.5015	0.0474	-0.0937	0.6520

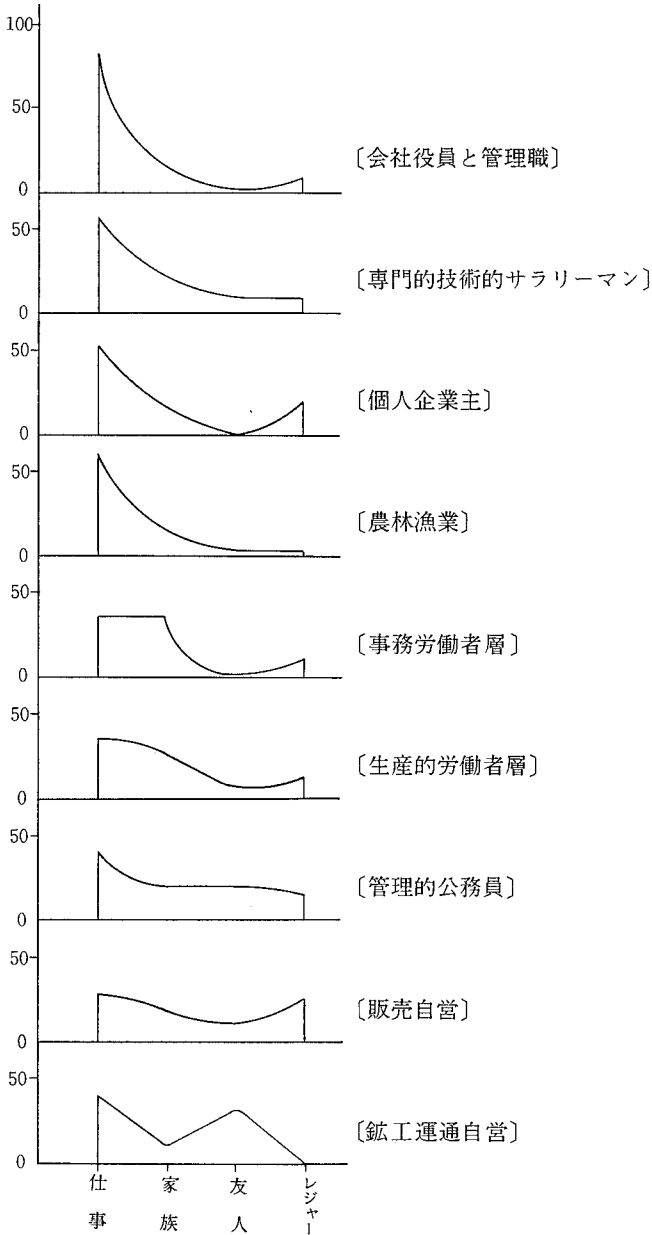
いて明らかに収入階層の上位ほど自己の労働の評価は高くなっている。その階層差も明らかであろう。

こうして、収入階層については次のようにいうことができよう。すなわち、生活満足のあり方、生活価値のあり方における階層差はおよそ世帯主年収で375万を境界として観察する事ができる。一方は物質的生活条件に関する労働の意味を重視し、労働の主体的要因、収入—地位に関する達成度の低い労働生活を余儀なくし、家族中心的生活価値などを生きがいとしつつ、生活全体の満足度も、労働—生活過程の基軸に関して相対的に低い階層をなしている。他方は、労働の主体的要因、自己実現の意味を労働生活の中心的価値として位置づけ、その労働生活の達成度も、労働の主体的要因、収入—地位に関して相対的に高く、また生活全体について Work Centrality 型の生きがい観をもち、労働—生活過程の基軸に関する満足度も高いということになっていた。要するに、収入階層—収入の大きさ、したがってまた、日常的消費生活の大きさ—のレベルの差は、労働生活—生活全体の質の差と結びついて、客観的にも主観的にも分化した階層の一次元を形成していると推定してよいのではないか。同一の生活の質のもとでの、例えば物質的な意味での収入—消費を確保し、最低生活を確保したり、あるいはそうした物質的生活水準の大きな向上を達成したいという共通の目標や要求のもとでの、達成度、満足度の量的差異としてのみ、この階層差は存在するのではないということも注意しておかなければならない。戦後段階、高度成長期段階と現段階は、この点で重要な変遷をとげているといえよう。(註5)

#### 〔生活の質と職業階層〕

さて、次に我々は職業階層と生活の質の関連について我々のデータを分析してみよう。いうまでもなく職業は様々な要因と相関が高く、職業的地位はその意味でもっとも総合的な社会階層の地位指標と考えられる。それだけに、特定職業階層が全体として生活意識次元からみてどんな生活の質をもつかを特徴づけることはかなり困難な事である。同一の職業階層上の地位には異なった他の地位指標からみた階層的地位が複数分散し、その分散には特定の性格が読みとられるとはいえ、収入階層のような階層的地位のように単純な様相を呈しない場合が多い。職業階層をどのような地位の複合体としてコードするかも分析上の技術として、実質的な階層を明らかにする上で重要であろう。ここでは既述のようないわゆる「階級・階層」カテゴリーに近似するコードを行なっている。しかし、サンプル数からみて分析しても妥当性を欠く職業階層については、ここでは取扱えなかった。

図 4



さて、まず生活全体の生きがい観についてみてみよう。図4は、量的に多数を占める4項目の生きがい観をとり、各職業階層に属する人にみられる生きがい観の分散のパターンを描いたものである。全体の中で量的にもっとも多い仕事中心型が多数をしめる順に、ついで量的に多い家族中心型が多数をしめる順に上から下へと並べてみた。ここから、概して、給与所得者のうちの経営者・役員層と専門的技術的サラリーマン、すなわち、新中間層の上層サラリーマンと、農林漁業・個人企業主などの旧中間層的色彩の強い層が、Work Centrality 型となっている。

仕事中心型以外のタイプに対応するものは、どちらかといえば家族中心型が他階層より多くなる事務労働者層、生産的労働者層と、友人・レジャー型が相対的に目立つ販売自営層、鉦工運通自営層ということができよう。

では、各職業階層に何らかの生活全体の満足のあり方の特性がみられるであろうか。

図5—1、図5—2は生活満足の7因子のスコアの各職業階層別平均値を求めたものである。全体としてパターンの似たものを一つの図の中に集めたのであるが、全体として基本的なパターンの差異は、大まかに自営業者と給与所得の間にありそうに思える。この両者の間のきわだった相異点の第一は老後生活に関する満足因子にみられる。これは年金制度等の制度的なアンバランスがこの両者の間にあるということが原因であって、当然のことといえよう。この点を除くと、ついで差異が目立つものは、住宅などを含む生活環境因子であって、この点について自営業者の満足の方が一般的に大きいものが目立つのも、地域を生産手段を含む生活手段として利用するこの職業階層の特質として理解しやすいように思える。これらのパターンの差異を消去するとすれば、基軸的な労働—生活過程上の差異が残るが、この点に焦点をおいてみると、労働生活の満足（私的動機充足の因子）では給与生活者はいずれも平均以上であるという基本的差異が明らかとなろう。その上で、給与所得者内部に会社役員・管理職、専門的技術的サラリーマン、管理的公務員などの新中間層の上層と、事務従事者、生産的労働者の間に量的な格差が生じている。

このように、生活満足意識についてみれば、大きく給与所得者の自営業者の間にパターンの差がみられるが、とりわけ、労働生活満足について、満足量の大きさが、上層の新中間層、ないしは、資本家階級に専門的技術的サラリーマン層を加えたもの、事務および、生産的労働者、自営業主という三層に分けられるような差異を示していることに注目しておきたい。



図5-1 給与所得者層の生活満足意識

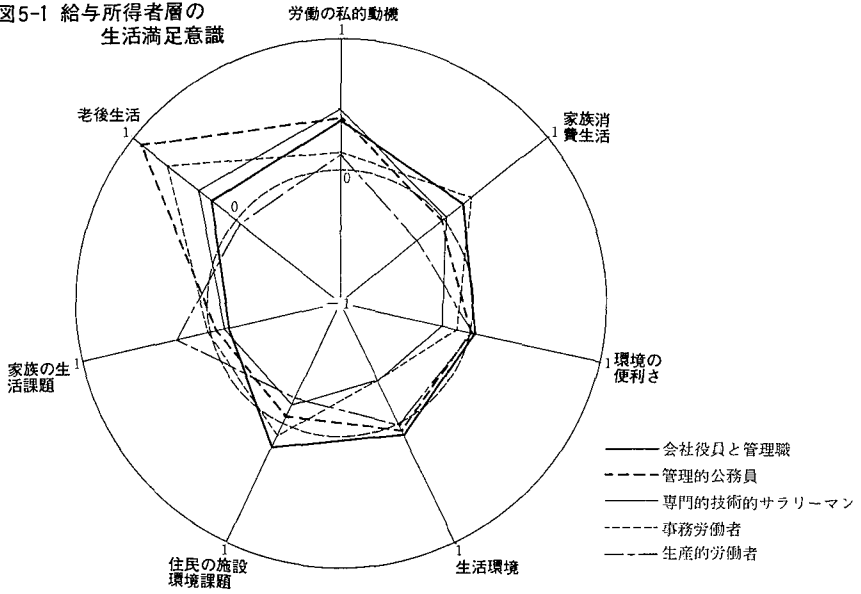
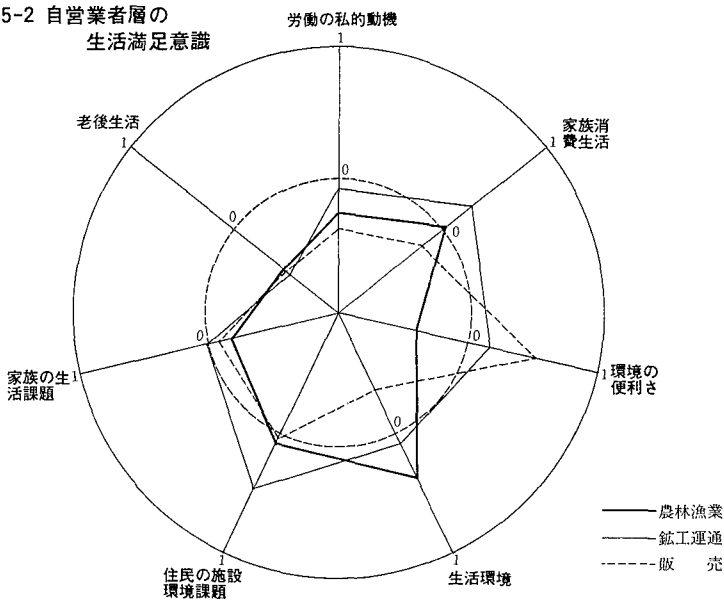


図5-2 自営業者層の生活満足意識



では各職業階層について、その労働生活の価値標準の点での何らかの特性を明らかにしうるだろうか。

図6—1、図6—2、図6—3は各職業階層にみられるそれぞれのクライテリアがしめる百分比を描いたものである。円の右側は労働の主体的要因であり、左側は客体的要因である。これによると、主体的要因について過半の人が重視している階層は上層の新中間層である事は明らかであろう。階級構成でいえば、資本家階級に専門的技術的サラリーマンを加えたものである。それに対して対照的であるのは、事務労働者層、生産的労働者層、および農民層である。これらはとりわけ、「収入」「雇用安定」「健康を損わない労働条件」を重視する人によって過半をしめられている。また、自営業主層は、「能力発揮」にかぎって主体的要因を重視する人が多いが、同時に「収入」をかなりの人が重くみている点で、両者と異なった労働生活価値をもつといえよう。

我々はここでも職業階層に同様な三つの層を区分することとなった。

図6-1

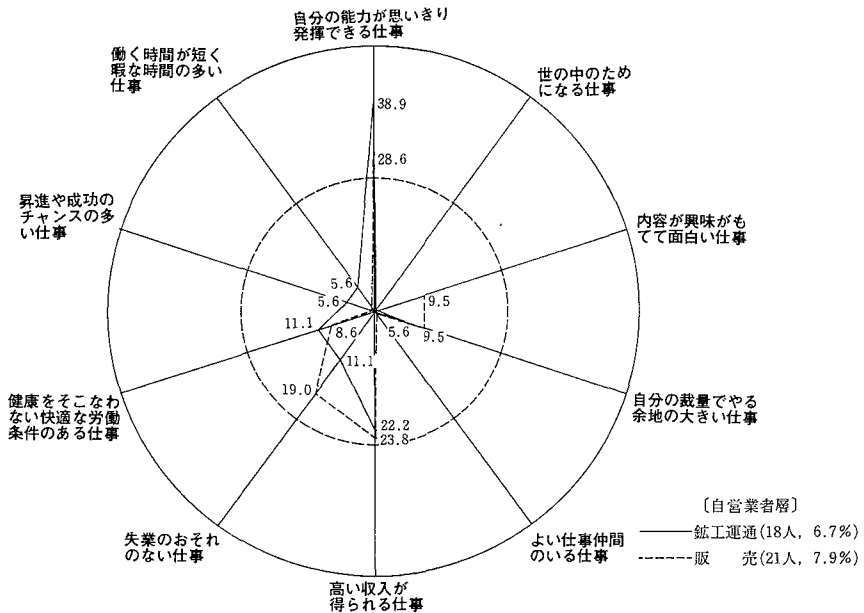


図6-2

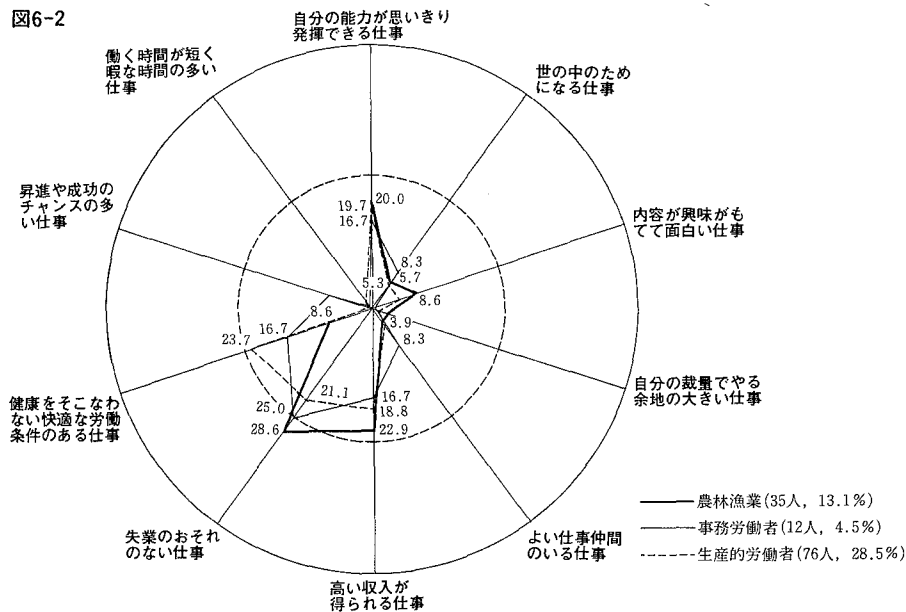
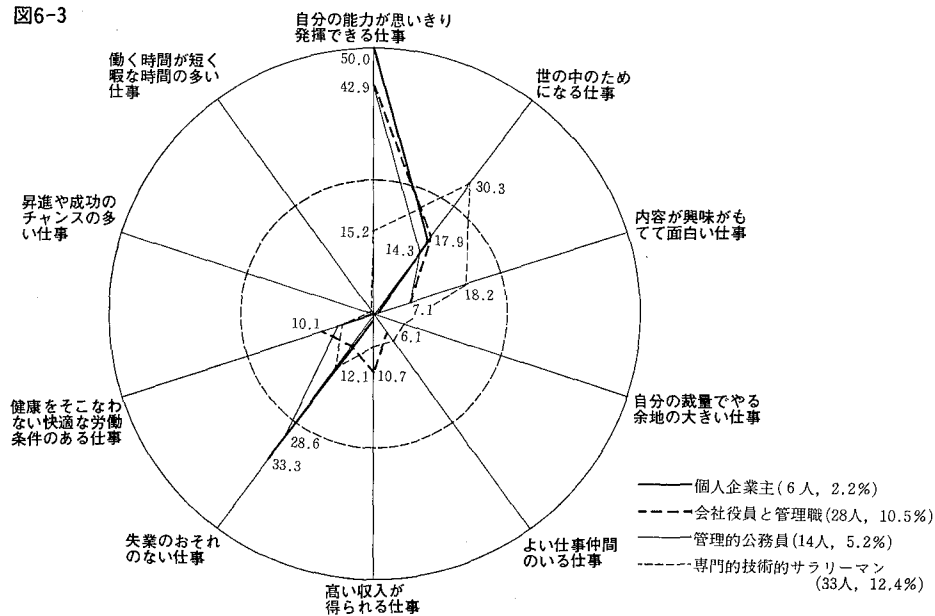


図6-3



ここまでの方法とまったく同様に、データにのみ依拠しつつ、労働生活の価値充足度、あるいは価値の達成度の4因子についてみると、どんな職業階層群が分類されるかを明らかにしてみよう。

図7-1、図7-2、図7-3によると、我々はやはり上記と若干のニュアンスを異にしつつも、同一の階層群に分類されるように思う。まず、個人企業主、会社役員・管理職、専門的技術的サラリーマン層の三層は、労働の主体的要因において達成度が高い。特に前二者は収入—地位において高い達成度を自己評価している。これに対して、事務労働者層、生産的労働者層、管理的公務員層は労働の主体的要因において低い。管理的公務員は労働の質においてこのタイプを示しているが、「収入—地位」「労働条件」の点で前二者と比較してきわだって高く、この点ではむしろ会社役員・管理職層に近いといえよう。自営業者層は、上記と異なった労働生活の価値達成度をもった層として区別することができよう。特に販売・鉱工運通自営業は、労働の主体的要因について平均をわずかに越えるのであるが、その他のいずれの因子についても達成度は低いといえよう。農民層はこれらと若干異なっ

図7-1

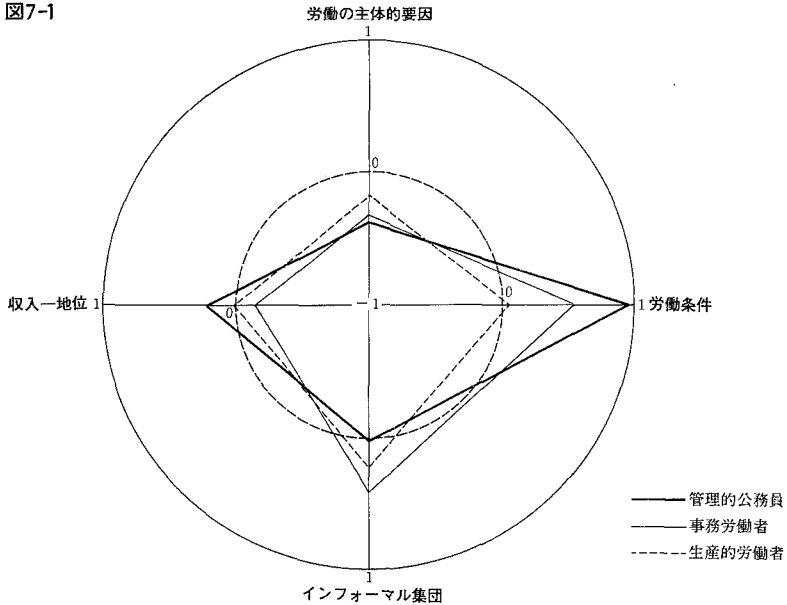


図7-2

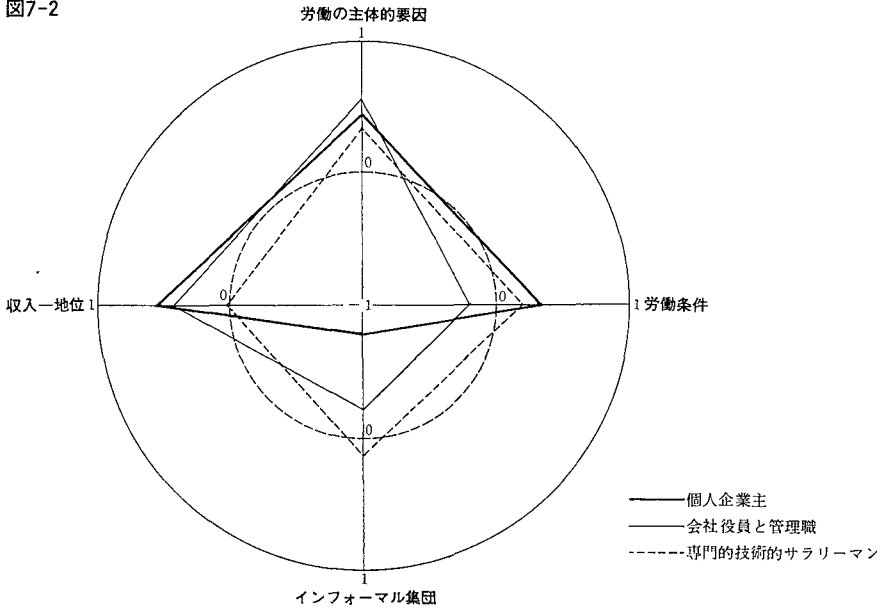
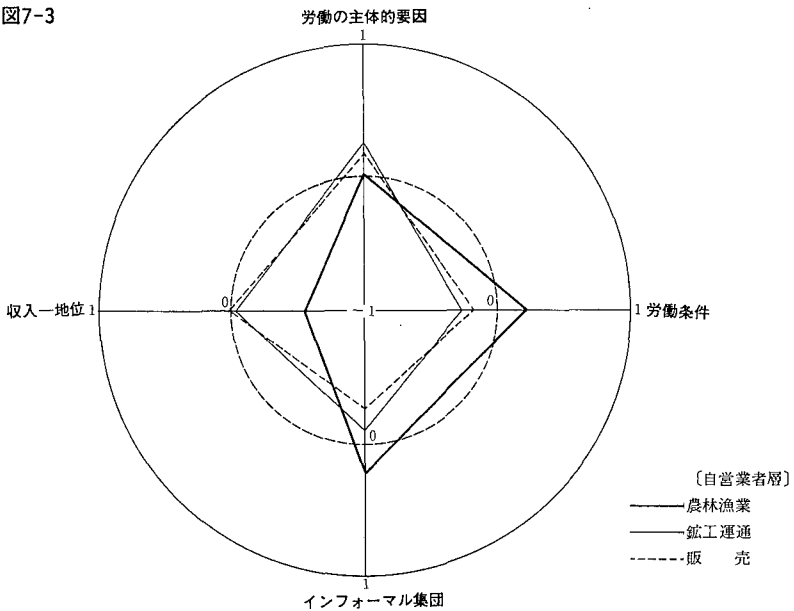


図7-3



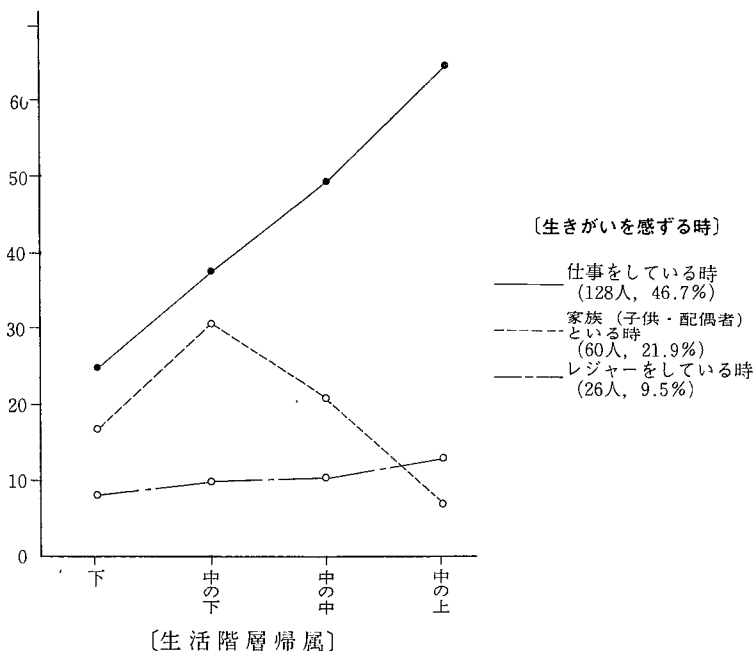
たタイプをなしているとも理解され、自営業層の特質を労働者層により近く移動させた形を示しているといつてよからう。こうして、大まかにいえば、我々はここでも基本的に類似の三層の区分に到達しようと思われる。

以上をまとめると次のようにいうことができよう。

(一) 職業階層は生活意識次元で生活の質を問題にするかぎり、(イ) 会社役員・管理職、管理的公務員、専門的技術的サラリーマンのグループ、(ロ) 事務労働者、生産的労働者、(ハ) 自営業層が分化している事を確認できた。これらはほぼ、いわゆる階級区分と類似してはいるが、労働者階級のうち、上層サラリーマンが資本家階級と近似した生活の質をもつものと思われ、新中間層として区別されることの妥当性を伺い知ることができると思われる。

(二) 各職業階層の労働生活の質の相異が、階層分化に大きなかわりをもつであろう

図8 中流階層帰属意識別にみた生きがい観



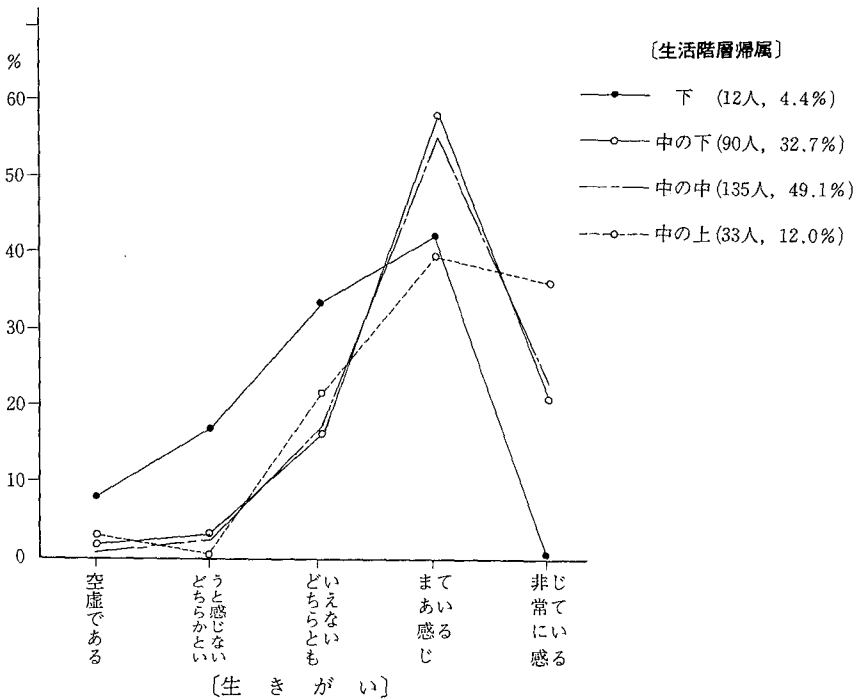
事がここに確認された。労働生活の質の相異がどのような客観的な労働生活の諸条件の相異と相関するかはここでの課題ではないが、そのような労働生活の客体的条件とのかかわりで最終的には説明されなければならないことはいうまでもない。

〔生活の質からみた中流（階層帰属）意識〕

では、中流階層帰属意識と生きがい観の関連はどのようなものなのか。図8は中流階層帰属意識上の各地位に含まれる生きがい観の比率をグラフ化したものである。これによると明らかに中流階層帰属上の地位が高いほど、Work Centrality 型の比率が増大する関係が読みとれる。これと対照的であるのが、家族生活中心型であり、「中の下」層を頂点に、帰属地位が高まるにつれ、このタイプは少くなっている。

同様に図9によると、帰属地位がどうであれ、生きがいを感ずる人が多数をなすという

図9

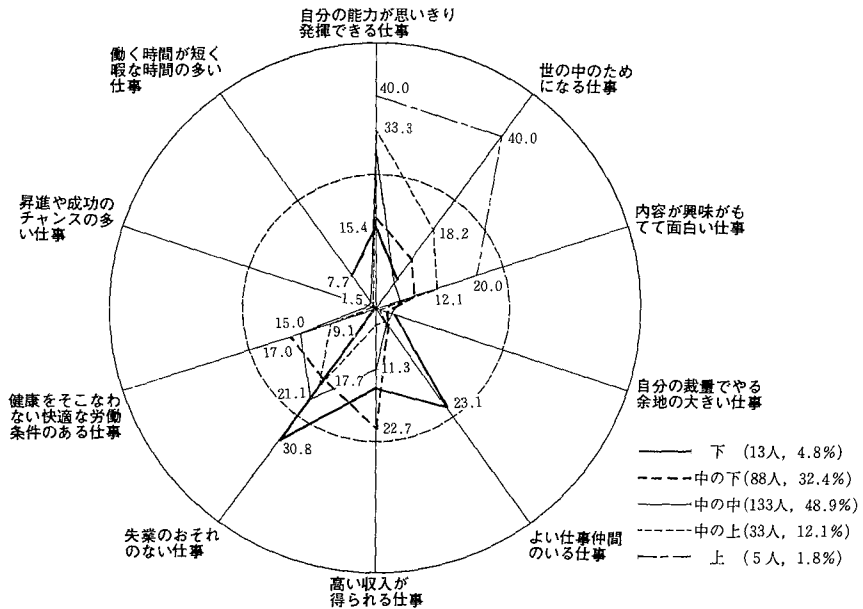


点では共通しているが、地位が上るほど、生きがいを感じる人の比率及び生きがいの程度が多少増大するという形になっている。いずれにしても、生きがいが、中流階層帰属と相関をもつ事は明らかのように思われ、量的な面よりも、質的な特性により明確な関連を見出すことができるとしてよいだろう。

次に中流階層帰属上の地位と労働生活の標値基準との関連はどのようになっているだろうか？

図10は同様に明確な関連を示しているといつてよい。すなわち、中流階属上の地位が上に行くほど、労働の主体的要因をクライテリアとする人の比率が増大している。とりわけ、「中の中」以上層は労働の主体的要因を重視する人が多数をしめ、「中の下」以下層には物質的生活諸条件を重視する人が多数をしめている。また、次の点も興味ある事実である。労働の主体的要因を重視する比率が少なくなるにつれて、「中の中」層は「雇用安定」を「中の下」層は「収入」および「健康を損わない労働条件」を重視している。

図10 生活階層帰属意識別にみた労働生活の評価基準





さて、我々はすでに前稿（一）において中流帰属意識が生活満足のあり方ときわめてよく相関し、また労働生活の価値達成度の自己評価と関係をもつことを明らかにしている。ここでは、単に生活満足の大きさによってのみではなく、中流意識が、労働生活の質的タイプとも相関する事が明らかにされた。

中流階層化の問題は、ゴールドソープ等の検討した *enbourgeoisement* の命題とかかわる問題である。（註6）彼らは労働者たちが中流階級と比較できる所得や生活水準を確保したというだけではなく、中流階級としての価値観などを形成し、同一化したといえるのかどうか等を検討した結果、「豊かな労働者」たちは労働に対して高い物質的生活水準の獲得を動機とする「道具的志向」をもち、また消費生活においても「家族中心志向」をもつなど従来の伝統的な態度の変化を確認したが、同時に、全体として、その変化が労働者階級の中流階級への同一化を意味しないことを明らかにした事は周知のとおりである。この点については、私共も日本について類似の結論に到達しているように思える。日本においても、全体として多くの人々が高い生活諸満足を示し、とりわけ物質的生活についての不満は解消しつつあるかのように見え、労働者階級といえども、かなりの人が労働生活に満足し、その主体的次元を重視する価値態度が形成されつつある傾向を予測しうるかのように見え、こうして中流帰属90%の現実を中流化と推定できるかにみえる変化が生じている事は事実である。労働者についてのみえば、労働者は物質的生活条件を重視する労働生活価値態度を示し、また「家族中心型」であるといえよう。しかし、こうした変化は歴史的にみれば動機づけの階層性を実証するだけのことでありとむしろ考えられる。これらの労働者における変化は、全階層の変化の中に位置づけてみれば、決して労働者階級の中流階級への同一化、全階層の均質な90%中流化の命題を正当化するものではないというべきであろう。我々の以上の分析は、むしろ「生活の質」からみれば90%の均質化ではなく、階層分化は階級・階層を基底に明確に存在しているということを明らかにしている。すなわち、以上によって生活意識からみた階層の基本的分化は、収入においては、およそ375万層を境界とし、職業階層では、(イ) 会社役員・管理職、専門的技術的サラリーマン層、(ロ) 事務労働者層、生産的労働者層、(ハ) 自営業者の三層となり、中流階層帰属意識では、「中の中」以上と「中の下」以下層において、基本的分化が観察しうると結論される。現実の階級階層行動は、基本的には二つのタイプの生きがい、労働生活価値観等をもち、異なった質の生活の豊かさを追求するところの上下の断層のある生活満足、労働生活達成

水準を得たものとして、少なくとも上記の三つ以上の地位の複合体として多次元的な様相を呈しつつ、総合的には三つの職業階層群の行動として理解される事になるのではないかと推定しておきたい。このような自生的な階層が現在もっぱら自己を中流階層として認知しているとすれば、そのような階層帰属意識は何らかのイデオロギーによる教化の作用の寄与なしには説明できないと思われる。かくして実体として成立している社会諸階級・諸階層を明らかにするには、更に、認知的意識諸要素、社会規範、とりわけイデオロギーの要素を諸階層について解明して行かなければならないだろう。これらは今後の課題としておきたい。さらにこのように実態の上で区分される各層が、主としてみずからどのような階級・階層に帰属するものと認知し行動しているかなどの社会的主体としての問題は、やはり後日の課題とせざるをえない。

また、最初に紹介した43のニーズ項目のうち20の生活諸関係に関する満足意識と、若干の社会的意識に関する調査の分析については、別の機会に譲ることにしたい。

- [註1] “生活の質”については例えば、萩原勝「日本のクリオリテイ・オブ・ライフ」至誠堂、を参照せよ。
- [註2] NHK放送世論調査所編「日本人の職業観」、労働大臣官房統計情報部編「勤労者の職業生活意識」
- [註3] 大阪大学主催、国際シンポジウム「労働生活の価値意識と態度」資料集
- [註4] 労働の主体的要因は、労働がそれぞれの「能力を発揮」すべきものという点に力点がおかれ、労働がどれほど自己の意志にもとづいて行なわれるかの自由の問題に力点はおかれていないという事も指摘されるべき点であろう。ここで「能力発揮」とは、それぞれが、それぞれの「能力」に対応して職業に配分されているという感覚を意味すると私は判断している。自由への動機、参加動機は日本において労働の重視されるべき価値や、動機とは必ずしもなっていないというべきであろう。この点は日本の特性にかかわる問題でもあろう。
- [註5] これに関して、石川晃弘氏の次の指摘が想起される。石川氏によると、労働運動における経済的要求の内容は、戦後の時期において基本的に最低生活の確保にむけられており、また高度成長期では、生活水準の大巾な向上、大巾賃上げであったとしている。更にオイルショック後は雇用確保と企業防衛が労働組合の主要課題となっているとしている。同上資料所収、石川晃弘：WORKER'S PARTICIPATION SYSTEMS IN JAPAN
- [註6] Goldthorpe 他 “The Affluent worker” I, II, III